View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

『おくのほそ道』と地方談林俳諧

――芭蕉が塗り替えた俳諧勢力文化圏――

森田雅也

一、はじめに

『おくのほそ道』の芸術性は今更言うまでもない。しかし、ここ二十年ほどの研究は、中尾本出現以来、テキスト精査、本文の丁寧な読みの問題に集中している。そのことは筆跡検証も含め、芭蕉研究においてとても重要な手続きであり、実際にそのことによって芭蕉俳諧に新しい地平が現出していることは誇るべきである。

ところで、一方で芭蕉（一六四四～一六九四）の『おくのほそ道』の旅以降、なぜ、あれほど隆盛を誇った貞門俳諧、それに続く談林俳諧が次々と急速に、長い歴史観からは瞬時に近い期間で消滅を迎えたのであろうか、近時になって、十七世紀の俳壇に起こった謎を解明すべき研究が断片的には行われている（江本裕氏・佐藤勝明氏等）ものの、長く棚晒しに近いことを省みる必要があろう。

江戸時代の文化史は江戸・大坂・京都といった三都中心の文化形成史を追えば、その徴表を得やすい。十七世紀の俳諧史も都市俳壇の形成を指標とすればある程度判然とするが、地方俳壇の形成もめざましいものがある。尾形功氏は、『おくのほそ道』（潁原退蔵共著・角川文庫　昭42）の「解説」（波線は森田）に

俳諧史的に見るならば、『野ざらし紀行』の旅より『笈の小文』の旅に至る期間は、ちょうど滑稽中心の談林時代より、叙景句を標榜した元禄の新風へ移る間の、俳壇の低迷期にあたっており、『おくの細道』の旅は、その低迷期より興隆期への転換面に位置している。（中略）こうした現象［低迷期に都市部から俳書出版部数が減少したにもかかわらず地方俳書は多く出版された現象］は、延宝末・天和以来の政治的・経済的事情によって、都市に居住する富裕な町人や武家を基盤とした都市俳壇が崩壊し、宗匠を中心に連衆が寄り集まって連句の楽しみをともにする精神共同体的な俳諧の場が、地方先進地帯に移行したことを物語るものであろう。

とされ、芭蕉『おくのほそ道』の旅前夜の現象として、地方俳諧文化圏の急速な展開という現象を認められている。さらに尾形氏は、

まさにこの間に行われた芭蕉の旅は、地方に台頭してきた俳諧の場をめあてに、地方俳壇の開拓を目的とするものであったとする見かたが成り立たないではない。事実、『野ざらし紀行』の旅において、芭蕉が大垣の旧友木因（ぼくいん）の東道により、桑名・熱田・名古屋を訪れて、尾張蕉門の成立を促し、『笈の小文』の旅に再度同地を尋（ママ）ねて俳席を重ねていることなどに徴すれば、たしかに芭蕉の旅には俳諧師としてのそうした実利的目的が伴っていたといえる。

とされ、芭蕉の紀行文としての旅の目的に、「俳諧師」としての蕉門拡大の野心が秘されていた可能性を指摘されている。ただ、芭蕉が旅に開眼した期間はたかだか十年にも満たない歳月であり、瞬時に談林俳諧など旧俳壇の勢力圏を塗り替える結果につながったとは判断しにくかろう。

それは日本に限らず、前近代においては、都鄙の文化交流が、地理的距離、それに伴う交通的移動の不便さから、文化の地方伝播には相当年月を要したものと頭から決めてかかる、諦念にも似た固定概念があるからである。したがって、芭蕉の『おくのほそ道』における「俳諧師」としての俳諧勢力文化圏の塗り替えの実態と方法は、作品の芸術

性の探究とは別に検証されねばならない。

だが、芭蕉は『おくのほそ道』の旅で約半年という期間で約六百里（二、四〇〇km）を踏破した。これは画期的なスピードでの地方への文化伝播である。もっとも、この同時期、西鶴（一六四二～一六九三）は海を利用してもっと多くの文化情報をもっと早く取得し発信しているが、この件は私が今年度も含めて長年参加してきた本学共同研究における「江戸時代における川海を利用した文化交流」の成果として別の場で報告したい。なお、紀要としての紙幅制限から、注記の正確さに欠けていることをお許しいただきたい。

二、『おくのほそ道』の旅と《蕉門》の確立と拡大

元禄二（一六八九）年三月二十七日～九月六日。芭蕉四十六歳の旅は、どのような俳人と出会っていくであろうか。『おくのほそ道』という作品とともに辿っていく。

まず、旅立つに際し、「松島の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り、杉風が別墅に移るに」と最も信頼していた門人、《蕉門》「杉風」の別宅「採茶庵」に移っている。そして、旅立ちと別れ。千住、草加（『曽良旅日記』によれば春日部）、室の八島、日光山の麓で「仏五左衛門」との邂逅があるが、俳人ではない。

四月一日、日光東照宮拝。ここでようやく黒髪山に寄せて同行門人「曽良」を紹介する。

「うらみの滝」を経て、「那須の黒ばねと云所に知人あれば」と「那須郡黒羽（現・栃木県大田原市）」で長逗留する。実に『おくのほそ道』中最も長い十四日間にも及んでいるのである。

それは「黒羽の館代浄坊寺何がし」の館があったからで、黒羽は大関大助増恒の一万九千石の城下町。その留守居役といえる黒羽藩城代家老浄法寺図書高勝は、俳号「桃雪」。芭蕉初期の号「桃青」から一字を頂くお気に入りの弟

子の一人である。主は喜び、弟「桃翠」は、久しぶりの師との語り合いは日夜に続いたと『おくのほそ道』にはある。芭蕉は兄弟の家に各々宿泊しているが、二人ともが江戸での門人かというと資料に乏しい。桃雪の弟は兄より一つ下で姓は「鹿子畑（当時は岡）」。「翠桃」が正しい。兄は、『俳諧書留』に「秋鴉主人の佳景に対す」として「山も庭に動き入るるや夏座敷」の芭蕉挨拶吟を残していることからも、芭蕉と俳友であったのであろうが、あくまで俳号は「秋鴉」である。「桃雪」は、『おくのほそ道』の旅で賜ったのではないか。『俳諧書留』に元禄二年四月十四日、翠桃邸で七吟歌仙が興行されたことを記すが、その連衆は、芭蕉、秋鶉、翠桃、曽良、翅輪、桃里、二寸となっている。このことからも「桃雪」は『おくのほそ道』で生まれた号であろう。そうなると、浄法寺図書高勝は、『おくのほそ道』を旅する芭蕉に会い、風交を深めることで、より確実な《蕉門》になったことになる。この論をすすめれば、『おくのほそ道』の旅の目的に地方《蕉門》確立の企図があったといえるかも知れない。それが長逗留となったのであろう。那須に長逗留することで黒羽の有力者たちを熱心な確固たる《蕉門》門下にすることで、この地の俳諧圏を塗り替えたのである。ただ、惜しくも「翠桃」は七吟歌仙の三年後、亡くなっている。

「修験光明寺」「佛頂和尚山居跡」「殺生石」と、浄法寺図書高勝の世話になり、四月二十日「遊行柳」で有名な「芦野の里（現栃木県那須町芦野）」へとやってくる。

ここでも土地の有力者「此所の郡守戸部某」の誘いに乗じている。「戸部某」とは、芦野三千石の領主で旗本の芦野民部資俊であるが、俳号「桃酔」。江戸《蕉門》の門下と考えられるが、その親密度は不明である。しかし、単なる西行ゆかりの名所「遊行柳」の訪問に留めず、本文でわざわざ「戸部某」とあげることは「桃酔」への挨拶と言え、これもやはり後日の地方《蕉門》確立につながったであろう。

そして、いよいよ四月二十一日、東北への窓口「白川の関」を越え、「須賀川」へ。「すか川の駅に等窮といふものを尋て、四、五日とゞめらる」とあるが、『旅日記』によれば、実際には七泊八日の長い逗留となっている。この間、

芭蕉をもてなした俳人「等躬（とうきゅう）」（一六三八～一七一五）は、相楽伊左衛門。須賀川の駅長と伝えるが確証はない。「未得」門。のちに「調和」に親しむ。晩年は露沾に親近したという。蕉門というより、芭蕉の俳友というべき関係であった（『俳文学大辞典』）。他書にも人物としての履歴は不明となっているが、江戸への往来が多かったのであろう、「未得（一五八七?～一六六九）」門下であったことは間違いない。「未得」は江戸における貞門派としてだけでなく、草創期の江戸俳壇を代表し、五哲に数えられた有力な俳人である。「未得」同様、「調和（一六三八～一七一五）」も江戸俳壇の重鎮であった。

「調和」は「未得」から受け継いだのであろうか。一門三〇〇人余り、当時の江戸俳壇で最大の勢力とみられ、折から台頭しつつあった桃青（芭蕉）一派にとって、最も大きな相手であった。また、彼は大名衆や旗本など高級武士階級を門人とすることによって社会的な名声と経済的支援を同時に手に入れることができた人物である（『俳文学大辞典』）。「調和」こそが芭蕉のライバルというより、芭蕉が蕉門拡大のための手本とした人物ではなかったかと考える。「調和」と同じ年の「等躬」は、江戸で芭蕉たち江戸蕉門との交流があったとされるが、急激に江戸俳壇に頭角をあらわした蕉門からは、一目置かれる立場にあった人物であったはずである。実際、晩年交遊を深めたのが岩城平城主の内藤露沾であり、「等躬」が亡くなったのはその露沾邸であった。

『おくのほそ道』の旅の中でどの来遊場所よりも福島周辺は武家を尋ねることが多い。これは明らかに芭蕉が右の内藤露沾の俳諧文化圏を意識してのことであろう。

内藤露沾（一六五五～一七三三）江戸時代の俳人。明暦元年（一六五五）五月一日磐城平藩主内藤義概（義泰、俳号風虎）の次男として江戸に生まれる。母は松平忠国の女。名は義英のち政栄。別号は傍池亭・遊園堂。嫡子に立ったが、天和二年（一六八二）にはこれを辞し退身、風流三昧の一生を送った。風虎サロンの後継者として活躍、福田露言・水間沾徳らの家臣門下が多く、松尾芭蕉とも親交があった。享保十八年（一七三三）九月十四

日没。七十九歳。（『国史大辞典』）

芭蕉が「調和」に見ならい、高級武士階級を門人とすることで《蕉門》拡大の一助としようとしたことは十分に考えられる。福島地方来遊は、その試金石であったのかも知れない。

芭蕉須賀川到来までは、正式な《蕉門》ではないものの、その「等躬」に芭蕉は、曽良、須賀川の連衆素蘭、等雲、須竿、栗斎（可伸）を加え、七吟歌仙を催している（『旅日記』）。「栗斎」は俳号で名は可伸。芭蕉がこの地の「大きなる栗の木陰」の庵を訪ねたが、その庵の主である。世捨て人のような人物で『おくのほそ道』の旅では西行に憧れる芭蕉が偶然知り合ったように書き、「西の木」の挿話を残しているが、須賀川俳壇を牛耳り、土地の名士であった「等躬」の最も親しい俳友ではなかったかと考える。もてなしたのは、むしろ芭蕉だったのではあるまいか。

このような今までに少しの知己を得たり、人を介して知った《蕉門》以外の地方俳諧文化圏の有力者に、親しい風交を求め、俳事を残し、《蕉門》を拡大していくのが『おくのほそ道』の旅のパターンとなっているのである。そう考えると、『おくのほそ道』の旅全体の中でも福島地方の滞在期間は比較的長く、名所旧跡が多い地とはいえ、来遊の目的は福島周辺の地を確固たる《蕉門》俳諧圏とする目的にあったとしてよかろう。

『おくのほそ道』の旅を右のような角度から分析すると、なるほど福島を出てからは歩みの速度が速まり、仙台の松島、奥州平泉、日本海側の象潟、後に詳述する最上川周辺・酒田は別として、新潟等を経て、数え切れない《蕉門》を志す人々と邂逅する石川の「金沢」まで長逗留はない。本来、『おくのほそ道』の旅は、

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に白川の関こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず。もゝ引の破を

つゞり、笠の緒付かえて、三里に灸すゆるより、松島の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り、（傍点は森田）と抑えきれない漂泊の思いによって、旅立つことは衆知のことである。その「松島の月」を見るべき旅が「松島の月」を観たのはわずかに旧暦五月九日～五月十日までの一晩に過ぎず、「いづれの人か筆をふるひ、詞を尽さむ。」として、曽良の「松島や鶴に身をかれほとゝぎす」という一句のみ残して立ち去ってしまうのである。

福島と同様なのは加賀金沢である。芭蕉が七月十五日～二十三日まで滞在した「金沢」の条には「金沢は七月中の五日也。爰に大坂よりかよふ商人、何処と云者有。それが旅宿をともにす。一笑と云ものは、此道にすける名の、ほの〴〵聞えて、世に知人も侍しに、去年の冬早世したりとて、其兄追善を催すに」とある。「一笑」は加賀金沢の人。小杉味頼、通称茶屋新七。元来は貞門派として活躍していたが、やがて加賀蕉門の中心として芭蕉を私淑していった。芭蕉は金沢に入って、「一笑」が前年に三十六歳で「早世」したことを知り、彼の兄「ノ松（べつしょう）」とともに追善句会を催し、「塚も動け我が泣く声は秋の風」と慟哭の句を詠んでいる。この折の句会は句集『西の雲』として「ノ松」によって編まれ、元禄四年に刊行された。

ある意味、芭蕉自身が『おくのほそ道』の旅において、最もたくさんの弟子に会い、近江以外の地方蕉門の確立を実感できたのは加賀金沢の地であったのかもしれない。『おくのほそ道』の旅に先立つ、貞享二年の『野ざらし紀行』の旅において、芭蕉は湖南に蕉門を確立したが、貞享四年に湖南の尚白撰になる『孤松』が刊行されているが、その作者三百七人のうち加賀からは五十九人おり、総句数二千五百二のうち加賀俳人のそれは七百十一であった（櫻井武次郎『奥の細道の研究』）。この加賀蕉門成立の功は、近江蕉門の中心として芭蕉の信頼が篤かった河合智月の弟・「乙州」（一六五七～一七二〇）によるところが多いと考えられる（櫻井武次郎同書）が、「乙州」自身は『おくのほそ道』にあわせて金沢に入り、この時初めて芭蕉と対面している。やはり実際の加賀での蕉門隆盛の中心は亡き「一笑」であったといえよう。しかしながら、「一笑」の死に落胆した芭蕉を次々と若い加賀蕉門の人々が訪問し、滞在

期間も九泊十日と長くなることで、その活気は芭蕉を元気づけて余りあったであろう。

ところで、『おくのほそ道』では、芭蕉が金沢の斎藤一泉の松玄庵で「秋涼し手ごとにむけや瓜茄子」の句を詠んでいることだけを記すが、『旅日記』には、「廿一日　快晴　高徹ニ逢、薬ヲ乞。翁ハ北枝・一水同道ニテ寺ニ遊。」とあって、立花北枝に会っている。

北枝（？～一七一八）江戸時代前期・中期の俳人。兄牧童とともに加賀金沢で刀研ぎを業とする。元禄二年金沢をおとずれた松尾芭蕉に入門、越前松岡まで同行した。芭蕉の教えをかきとめた「山中問答」をあらわした。一時土井姓を名のる。享保三年五月十二日死去。通称は研屋源四郎。別号に鳥翠台など。編著に「卯辰集」「喪の名残」など。（『日本人名辞典』・波線は森田。以下同じ。）

ようやく「越前松岡」の「天龍寺」（福井県永平寺町）という永平寺の末寺の条で、「又、金沢の北枝といふもの、かりそめに見送りて、此処までしたひ来る。」と、簡単に金沢から福井まで見送ってきた人物として紹介されている。芭蕉に会うことで蕉門に入門し加賀蕉門の中心人物となるが、亡くなった「一笑」からすれば、年齢の高さからは加賀俳壇の旧派ということになろう。ただ、「一笑」をその兄とともに追善し、加賀蕉門の隆盛を支えた人物としては見逃せない。

途中、曽良とは別れたものの芭蕉は北枝とともに、金沢から小松・山中温泉・全昌寺・汐越の松と遊び、福井の天龍寺で別れるが、それが二十五日。加賀の地を堪能するのである。

途中の山中温泉では宿の主人「久米之助」の逸話を記している。「久米之助」とは宿屋和泉屋の主人甚左衛門。当時十四歳であるが、この時、芭蕉から「桃妖（とうよう）」としいう俳号を貰っている。

あるじとする物（ママ）は、久米之助とて、いまだ小童也。かれが父、俳諧を好み、洛の貞室、若輩のむかし、爰に来りし比、風雅に辱しめられて、洛に帰て貞徳の門人となつて世にしらる。功名の後、此一村判詞の料を請ずと云。

今更むかし語とはなりぬ。

つまり、この「山中温泉」の地は昔から俳諧が盛んに行われ、松永貞徳亡き後、貞門の後継者として自負したほどの「貞室」がその若き日、俳諧の風雅の道を教えられたほどの地だというのである。その俳壇を牛耳っていた貞門の門流に連なる父を持つのが宿の主人「久米之助」であった。いくら若輩とはいえ、「山中温泉」の地の俳壇の中心的人物を芭蕉はあっさりと《蕉門》に組み入れてしまったのである。加賀俳壇の重鎮北枝の前での出来事である。北枝自身、このたびの芭蕉の加賀遊歴で忠実な《蕉門》となった人物である。「久米之助」に限らず、一時代前まで貞門であった加賀俳壇が、芭蕉との直接邂逅で《蕉門》となっていく実態は、今は亡き「一笑」ら貞門から転じた若き加賀《蕉門》の影響で、門下に組み込まれたのではないとしたい北枝らベテラン俳家の面目を満足させたのではなかろうか。北枝の芭蕉への献身は、老若関係なく加賀俳壇の全ての人々が《蕉門》に転身し易くなり、結果、地方《蕉門》を拡大するのに大きく貢献することになるのである。

ところが、越前福井俳壇でも、《蕉門》拡大のその方法が「北枝」のコピーのように「洞栽」に受け継がれる。「爰に等栽（ママ）と云、古き隠士有。いづれの年にか、江戸に来りて予を尋。遙十とせ余り也。いかに老さらぼひて有にや、将、死けるにやと人に尋侍れば、いまだ存命して、そこ〳〵と教ゆ。」と、旧友「等栽」との再会を果たす。

洞栽（とうさい）俳諧作者。生没年未詳。神戸氏。等栽・等哉とも。等栽は『おくのほそ道』中の仮名。別号、可卿（茄景）・一遊軒。貞門の俳家で福井俳壇の古老。芭蕉と旧知の間柄で、元禄二年八月、奥羽・北陸行脚の芭蕉を越前国敦賀・色の浜に随伴して句文を残した。（『俳文学大辞典』）

「等栽」は江戸では純粋な《蕉門》とは言えないものの、「その家に二夜とまりて、名月はつるがのみなとにとたび立。等栽も共に送らんと、裾おかしうからげて、路の枝折とうかれ」立って芭蕉の旅の案内人のごとく、福井嶺北から嶺南敦賀へと旅をしているのである。

そして、敦賀の種（いろ）の浜へ。「十六日、空霽たれば、ますほの小貝ひろはんと、種の浜に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云もの、破籠・小竹筒など、こまやかにした、めさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時のまに吹着ぬ。」と『おくのほそ道』は書くが、当時、「等栽」が紹介したと推測すれば、この地の俳壇の中心が「天屋何某」であったことがわかる。『おくのほそ道』の多くの注記は「天屋五郎右衛門。室氏。俳号玄流子。敦賀の回船問屋」（『古典文学全集』）という程度の情報を載せている。『おくのほそ道』では、病中不在の曽良に代わり、「其日のあらまし、等栽に筆をとらせて寺に残す。」として「等栽」は芭蕉から敦賀での一切を託されていたことを記しているが、そのことで敦賀俳壇と「等栽」の間のただならぬ親しい関係が推測できる。

ところが、その肝心の「等栽」の俳業は、現段階の研究では不明である。ましてや、「等栽」と敦賀俳壇との関係になると、俳諧文化圏のつながりどころか、敦賀との地縁すら何にも記されていない。

そこでその点について、研究途次ながら、ある仮定を提出したい。

「等栽」は『おくのほそ道』の注釈書『奥細道菅菰抄（蓑笠庵梨一・安永七（一七七八）年刊）』には、

等載（ママ）は、もと連歌師。福井の桜井元輔と云もの、弟子にて、等載は連歌の名。俳名は笳景と云けるとぞ。元輔は、宗祇の門人にて、さてはあの月が啼たかほと、ぎす、といふ句をせし者なりと云伝ふ。

とある。『奥細道菅菰抄』はすぐれた研究書であるが、蕉門中興期に書かれた後世の注釈であるため、そこは差し引かねばならない。誤認もある。例えば、三木慰子氏翻刻の『奥細道通解』［馬場錦江・安政五（一八五八）年序］が指摘するように、「宗祇の門人」とすると「一百八十八年宗祇再傳して等栽に至る」というような例である。

しかし、「等栽」が「桜井元輔」門下であることは大いに注目できる。この「桜井家」が福井若狭の名家「桜井家」に連なるものなら、土地の実力者として連歌・俳諧文化圏が存在し、その門下である「等栽」が芭蕉を「種の浜」まで伴い、今はその若狭俳諧文化圏の中心人物と目される「天屋何某」を紹介したのではあるまいか。調査中である

が、未だ資料証左ができていない。

とにもかくにも、「等栽」の活躍によって、縦に長く、嶺北福井から嶺南敦賀まで、《蕉門》俳諧文化圏が一気に広がった意味は大きい。

関ヶ原の合戦直後において、一番目の石高を誇った藩は加賀金沢藩一〇〇万石である。そして、次の大藩は越前福井藩六十八万石であった。福井藩豊臣家より石高が高かったが、その後の諸事情で順位を下げていく。それでも石高の多さを有する加賀・越前は豊かな土地であり、その裕福ぶりは文化水準の高さにつながる。

『おくのほそ道』の旅によって、《蕉門》勢力圏は一気に金沢から福井、敦賀という古代からの陸の流通路である北陸道でつながることになったが、この加賀・越前の《蕉門》には商人が多い。豊かな文化圏を富裕な《蕉門》で固めたことは後々測り知れない力となったであろう。また敦賀は京都にとって海路で全国につながる表玄関であり、要衝である。西廻り航路ができるまでは敦賀―琵琶湖―淀川が大坂につながる流通ルートであった。一時の盛時には及ばないものの、明治まで流通ルートとして栄えた場所である。《蕉門》にとって琵琶湖とつながることは、地方俳諧文化圏のとしての大勢力、近江《蕉門》とつながることとなる。湖運の繁栄はやはり明治まで続き、湖東文化、湖西文化の区別なく、高い水準を保った。義仲寺勢力が芭蕉の俳諧活動に欠かせなかったのは、このためであるが『おくのほそ道』の旅は見事、江戸以外の地方俳諧勢力文化圏に全国区で挑む体制が整い始めたのである。

その成果は当初から芭蕉が劃策していたものではあるまいか。『おくのほそ道』の旅を快癒した曽良など多くの芭蕉門下の弟子が鶴首する「大垣」に向かい、再会の喜びをともに分かち合う喜びの場で結んでいる。

「大垣」の条は、敦賀まで大津《蕉門》の「路通」が迎えに来るところから始め、美濃大垣で出迎えた門弟たちを描く。挙がる名は、尾張《蕉門》の重鎮「越人」、大垣《蕉門》の「如行」、大垣藩士で《蕉門》の「津田前川」、同じく大垣藩士「荊口親子（親・宮崎荊口。子・此筋、千川、文鳥」と身分、地域ともバランスに富む。

其外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふがごとく、且悦び、且いたはる。旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮おがまんと、又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

とする疲れを知らぬ芭蕉の旅の人生で締めくくる大団円は、西鶴『好色一代男』〔天和二（一六八二）年刊〕の世之介が六十歳を迎えながら雲隠れや隠棲をせず、なお、女護ヶ島に向けて漕ぎ出していく、爽快さに通じるものを感じないではいられない。

ただ、このお祭り騒ぎの大団円の中に、実際には出迎えたにもかかわらずなぜか描かれていない人物がいる。「谷木因（たにぼくいん）」である。

曽良の『旅日記』に、「（長月）三日　辰ノ尅、立。（中略）大垣ニ着。天気吉。此夜、木因ニ会」「六日　同。辰尅出船。木因、馳走。」とあるように、芭蕉は大垣で「馳走」にまで預かりながら、「木因」を『おくのほそ道』に描き込んでいないのである。「木因」は、

（一六四六～一七二五）江戸時代前期ー中期の俳人。正保三年生まれ。家は美濃大垣の船問屋。北村季吟の門から談林風にうつり、松尾芭蕉の感化をうけて後年蕉門にはいった。享保十年九月三十日死去。八十歳。通称は九太夫。別号に白桜下、観水軒。著作に「桜下文集」など。（『日本人名辞典』）

という人物である。「木因」の名はなぜ消えたのであろうか。その要因を俳人「木因」から探るには、多方面からの分析が必要となろうが、ここでは「北村季吟の門から談林風にうつり」という「木因」の俳歴に焦点を絞り、以下論じたい。

三、地方談林文化圏と『おくのほそ道』の芭蕉

芭蕉は、大垣の「木因」のもとに『おくのほそ道』も含め、四回の訪問を行っている。一回目は、貞享元（一六八四）年。八月、江戸深川を発した芭蕉は、郷里伊賀上野に帰省し、続いて近江路より美濃路に入り、関ヶ原・垂井・宮代・表佐を経て大垣に入り、木因を訪問をしている。いわゆる『野ざらし紀行』の旅である。二回目は、元禄元（一六八八）年、奈良から大坂・兵庫を巡歴し、京都から大津、その江戸への帰途、美濃に来遊した。芭蕉は、名古屋・鳴海方面をまわり、八月十一日、美濃路を経て江戸へと戻る途中に姥捨山伝説の地、信州更科の名月「田毎の月」を見て帰ることを企図する。これが『更科紀行』の旅である。三回目が元禄二（一六八七）年の『おくのほそ道』の旅。四回目は、元禄四（一六九一）年の秋、京都から江戸への旅の途次である。

芭蕉の四回の美濃俳壇との交わりは、芭蕉四大紀行文のうち、三作品に関係する重要な位置にある。交通の不便な中、いかに芭蕉が「木因」を大切にし、美濃の地を敬愛したかがわかる。もちろん、美濃における《蕉門》の浸透は、後の各務支考の美濃派形成に大きく寄与しているが、芭蕉との子弟関係となると簡単にはいかない。

松永貞徳の弟子、北村季吟を師とする点で芭蕉と木因は同門である。しかし、大垣の裕福な船問屋である木因は季吟に秘伝を伝授されるほど（森川昭『谷木因全集』）の博学である。芭蕉は「蝉吟」こと、藤堂藩士大将家藤堂良忠のお供に近い形で季吟に近づいたはずである。後の談林俳人との出会いでも木因の格は芭蕉よりも高い。木因にすれば、自ずから、芭蕉とは俳風も違い、何よりも大垣俳壇の頂点に君臨している。いくら芭蕉の俳人としての実力を認めるにしても、何も振興の《蕉門》の下風に立つのを潔しとしないのは当然であろう。

地方俳諧圏の盟主は、経世家としての木鐸である場合が多い。単なる句会の場だけの主導者ではないのである。

同時代、そのように地方俳壇形成を行った典型的人物が河内俳壇の主導者「三田浄久（さんだじょうきゅう）」である。

（一六〇八～一六八八）江戸時代前期の俳人。慶長十三年生まれ。松永貞徳にまなぶ。同門の北村季吟、安原貞室、談林派の井原西鶴らと親交があった。延宝七年「河内鑑（かわちかがみ）名所記」をあらわす。河内（大阪府）柏原で廻船業大文字屋をいとなんだ。元禄元年十一月二十七日死去。八十一歳。安芸出身。本姓は水野。名は浄久（きよひさ）。通称は庄左衛門、七左衛門。別号に不老軒。（『日本人名辞典』）

「廻船業大文字屋」を営んでいた浄久は大和川の川運を一手に握っていた経世家であった。当時日本一の生産量を誇っていた河内木綿の綿布を河内平野の諸処から川船で回収し、大坂湾へと搬送する。そこからは別の業者が商うわけであるが、帰路川船は、西宮浜・和歌山などの地引き網、底引き網で大漁にとれた鰯から加工した安価な干鰯などの肥料を河内平野の綿農家へと送配する。このノコギリ商いによって、巨万の富を得た「浄久」は、商いの第一線から退き、その配下の川船廻船業者や富裕な大和川周辺の河内農家・富裕層を中心に文化形成を行っていく。まず、古典学習による教養学習である。この集団の読書熱が大坂貸本屋の隆盛を支えることになる（長友千代治『近世貸本屋の研究』・今田洋三『江戸の禁書』）。その熱は昂じて俳諧熱となり、松永貞徳の後継者「安原貞室」を河内柏原に招くほどになるが、その折、貞室が携えた琵琶の筐体を「神代の秤」と間違えた柏原の人の無風流を笑うエピソードも残っている（『西鶴名残の友』巻二の二）。ただ、その『西鶴名残の友』に

河州柏原の里に浄久と名乗て無類の俳諧好、老のたのしみ是ひとつと極めて、句の善悪にもかまはず、只題目のかはりに是ぞとのおもひ入、殊勝なり。（『対訳西鶴全集　第十六巻』）

とあるように地方俳壇を形成した人々が「無類の俳諧好」であって、俳諧が「老のたのしみ」として、芸術性より娯楽性を追求した俳諧文化圏を形成していったという実態は、河内俳壇や「浄久」に限らないであろう。しかし、その一方で中央の貞門派に連なるという権威付けを求めるのは、地方俳諧文化圏形成の縮図ともいえよう。江戸談林の中

心として、宗因を江戸に招き、「十百韻」を興行し、『談林十百韻』として刊行した、遠江国豊田郡草崎の廻船問屋「野口在色」の場合（寺田良毅『遠州の俳諧地域を支えた雑俳と俳諧』等）や尾張国鳴海宿の庄屋・酒造業の「下里知足」の場合（森川昭『下里知足の文事の研究』近刊予定）も同様と考えるが、他にも多く考えられ、この実態を著者森田は科研課題として調査中である。

『おくのほそ道』の旅の場合、木因と同様な立場にあったのが、「尾花沢」の「清風」であったといえよう。

尾花沢にて清風と云者を尋ぬ。かれは富るものなれども、志いやしからず。都にも折々かよひて、さすがに旅の情をも知たれば、日比とゞめて、長途のいたはり、さま〴〵にもてなし侍る。

と、『おくのほそ道』の旅で最高の賛辞を送っている。それは、芭蕉との今までの懇意の度合いにもよるであろうが、この地域での滞在は、実に五月十七日～二十七日まで、十泊十一日という長い逗留を残している。よほどくつろぐことができたのであろうか、『随行日記』によれば昼間から風呂に入ったり、大石田、高野平右衛門亭にて件の「五月雨を集て涼し最上川」から始まる歌仙を巻いたり、毎晩のように地元の俳人に招かれている。何よりも、

涼しさをわが宿にしてねまるなり

という句がすべてを物語っている。自分の家にいるような気のおけないくつろぎを得た芭蕉は、山形方言「ねまる」という語まで用いて、清風の歓待への感謝と喜びを表現しているのである。

清風こと鈴木道祐（一六五一～一七二一）はこのとき三十九歳。芭蕉より若いこの人物は、すでに地域での経済的、文化的、何よりも俳諧のリーダーである。

通称、嶋田屋八右衛門。別号、残月軒。法名、道祐。出羽国尾花沢の富商。金融業を営む傍ら、出羽国の物産の問屋を兼ねた。俳諧においては、延宝七年（一六七九）刊の『俳諧中庸姿』独吟歌仙一巻が収められ、同九年には『東日記』に発句二が入集、さらに延宝末年から貞享（一六八四～八八）にかけて『おくれ双六』『稲筵』『俳

諧一橋』を刊行した。これらの撰集を通じ、京都の友静・信徳・湖春・如泉、江戸の言水・才麿・調和・幽山、陸奥国仙台の三千風らと交流があったことが知られるが、中でも言水との関わりが深い。貞享二年、江戸で芭蕉・其角・才麿らとの「古式百韻」（『芭蕉翁古式之俳諧』所収）に一座したのち、翌年三月、芭蕉らと「花咲きて」七吟歌仙を巻いて芭蕉に接近、元禄二年（一六八九）には『おくのほそ道』旅中の芭蕉・曾良を迎えて「涼しさを」五吟歌仙、「おきふしの」四吟歌仙を興行した。以後、『其袋』『蓮実』『継尾集』『伊達衣』などに発句が散見するが、晩年には俳諧から遠ざかったようで、享保元年（一七一六）に譚北・祇空が訪問した時は、それを理由に一宿を断っている〈『烏糸欄』〉。作風は談林末期の佶屈晦渋な風の影響が強いが、晩年には平易で穏やかな句も見られる。（『俳文学大辞典』）

この当時、紅花は口紅だけでなく染料として、全国からその需要は拡大していた。清風も単なる原料生産者としてだけではなく、最上川を幹線として山形・酒田港から日本海を経て、大坂・江戸へと出荷する流通ルートを握る実力者であった［清風の門下「一栄（高野平左衛門）」は『おくのほそ道』で芭蕉来訪時、自宅で句会を催し、「五月雨の」の発句を得るが山形藩領大石田村組頭で、船持荷問屋業であった］。その流通ルートを利用して、自ら京・大坂・江戸に赴いて商用をなすとともに、季吟、西鶴、芭蕉など当時のトップクラスの俳人たちと風交し、研鑽を行っていたのである。その成果として、最上川水系の人々に俳諧を広げていた。しかし、その貞門派・談林派・《蕉門》まで句風を広げすぎた悩みが、そのまま清風編『誹諧おくれ双六』［延宝九（一六八一）年刊］の序に吐露されている。

予も同国（出羽）の所生と云ながら、心の花の都にも二年三とせすみなれ、古今俳諧の道に踏迷ふ。近会（ちかごろ）より漸く新しき海道に出て諸人をまねき、四季折々の佳作を得る…

「古今俳諧の道」＝「貞門派・談林派」、「新しき海道」＝「《蕉門》」とするのは拙速な図式ながら、その図式はふたたび『おくのほそ道』「大石田」の条で語られる。

最上川のらんと大石田と云所に日和を待。爰に古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花のむかしをしたひ、蘆角一声の心をやはらげ、此道にさぐりあしゝて、新古ふた道にふみまよふといへども、みちしるべする人しなければと、わりなき一巻残しぬ。このたびの風流、爰に至れり。

「此道にさぐりあしして、新古ふた道にふみまよふ」が、「貞門派・談林派」としての旧派句風への撞着とすれば、「みちしるべする人」=「芭蕉」の到来で、その句風が一新したというのである。「このたびの風流、爰に至れり」と芭蕉が雀躍するのは、『おくのほそ道』の目的の一つが達成した悦喜によるのではあるまいか。

芭蕉と清風の関係は、芭蕉が『誹諧おくれ双六』に桃青の俳号で加わり、今度は清風が貞享二（一六八五）年、江戸小石川での芭蕉主催「古式百韻」に連衆として参加し、さらには芭蕉が翌年、清風主催の七吟歌仙を興行した際に連衆として参加するという別懇ぶりであった。ただ、清風以外の最上川俳壇ともいうべき連衆となれば、《蕉門》とは疎遠であったはずである。むしろ、芭蕉以前では、清風と懇意であり、この地を先に来訪していた談林派「大淀三千風」（一六三九～一七〇七・本姓は三井）の方がなじみ深かったのではなかろうか。

談林系だが特定の師はない。伊勢国射和の商家に生れる。三〇歳ごろまでは家業に従事するが、寛文九年（一六六九）、三一歳の時、俳諧師となるため陸奥国松島に赴き、のち同国仙台に住して約一五年滞在。延宝七年（一六七九）三月五～六日、梅睡庵において矢数俳諧に挑戦、二八〇〇句独吟を成就。追加二〇〇句とともに『仙台大矢数』として刊行する。仙台では多くの門弟を擁し、『松島眺望集』なども刊行。天和三年（一六八三）四月、『日本行脚文集』の旅に出立する。元禄二年（一六八九）までの七年間、北海道や九州の一部を除く津々浦々を巡り歩き、諸国の俳人と風交を重ねた。元禄三年には旅中に得た詩歌句文を収めた『日本行脚文集』を刊行。元禄八年には西行遺跡の相模国大磯鴫立沢に庵を構え、元禄十年が西行五〇〇回忌にあたるとして境内に西行堂を建立、謡曲『鴫立沢』を刊行して沢の興隆を図った。元禄十四年には、鴫に関わる詩歌句を集めた『倭漢田鳥

集』を刊行。同年、吉原の遊女二〇〇〇人の寄進で作られた虎御前木像を収める法虎堂を建立する。また、元禄十一年から同十三年までと、同十五年から翌年にかけて二度九州を訪れ、三千風流の普及に努めている。三千風は終生地方俳人として終始したが、仙台や九州俳壇に影響を与え、京の和海もその門人といってよい。（『俳文学大辞典』）

知られているように清風の門人素英（そえい）（村川伊左衛門）は、三千風の甥。父六郎兵衛は、伊勢国射和の生まれで、三千風と三井宗智（六郎兵衛）とは兄弟である。貞享三（一六八六）年九月、三千風は尾花沢に三十日余り滞在し、その間、残水、宗圓といった尾花沢の縁者や、似休等の旧友、先述の一栄らと交流を図り、談林俳諧に遊んでいる（『日本行脚文集』）。「大石田」の条の「爰に古き俳諧の種こぼれて」は、この「三千風」俳風、すなわち談林俳風が根付いていることを指しているに違いない。しかし、芭蕉はそのことを「蘆角一声の心」とありやなしやの韜晦性を帯びた言葉で濁してしまい、解釈するにも昭然としない。

その指摘せぬ原因は今なお残る、「みちのく」における「三千風」とその門下への配慮と遠慮ではなかったであろうか。それは『おくのほそ道』「仙台」の条で「画工加右衛門」こと大淀三千風門下の画工北野屋加衛門と知り合いになりながら、珍しく仙台俳壇とともに句会を催していない事実でも確認できるのではなかろうか。

清風門下は芭蕉来訪以降、一栄、泉水のように《蕉門》となる者がいても、清風門下がすべて一度に《蕉門》に靡いたとは考えにくい。

このように仙台から尾花沢、酒田に至る旧来からの地方談林俳諧は、『おくのほそ道』の旅だけでは容易に《蕉門》に塗り替えられてはいないのである。

四、談林俳諧文化圏とは

ここで『おくのほそ道』前夜の俳諧史を検討したい。そもそも日本文学史において、「談林俳諧」とはどのような集団であろうか。

その概念を今さら問い質すのは憚られることであるが、一応の定義を『国史大辞典』が立項する「談林俳諧」を引いて検証したい。

江戸時代の俳諧の流派。檀林とも。延宝期を中心に前後十余年間、貞門俳諧に続いて俳壇の主流を占めた。当初、江戸の田代松意一派を江戸談林と称したが、それが漸次延宝期の西山宗因を中心とする新風をいうようになった。寛永期以来半世紀にわたって流行した貞門の言語遊戯中心の俳風が陳腐化し、清新な風を期待する声にこたえて、まず新興商業都市大坂に登場し、貞徳風よりも守武流をかかげ、大坂天満宮連歌師西山宗因を中心にかつぎ、句風も脱線し、謡曲調から、無心所着、寓言論をほしいままにし、貞門からはぬけ風・飛び体・阿蘭陀流と罵られながらも、伝統的定型の破調、倒装法や見立て、速吟の流行などを特徴とした。延宝に入って俄然大坂俳壇の新風が一挙に顕在化し、井原西鶴の『生玉万句』『歌仙大坂俳諧師』、宗因の『宗因千句』『蚊柱百韻』の刊行がそれであり、貞門側との間に泥仕合的論戦がくりひろげられる中を、延宝三年（一六七五）宗因が東下すると、急速に江戸俳壇も談林化し、若き日の芭蕉もこれにもまれて談林風に染まった一時期があったし、松意・幽山・似春らが追随した。また京都では、「惣本寺」と称した高政をはじめ、常矩などがいた。大坂では西鶴が一方の旗頭であった。要するに、素材・形式・作法などすべてにわたって、貞門古風のマンネリズムを打破して新奇意表を競ったわけで、その度が過ぎると行きつくところを知らない堕落の弊に極まって文学からはみ出る恐

れがある。すなわち極端な字余り、漢詩調の難解句などの放縦乱雑に陥り、ついに宗因の没した天和二年（一六八二）前後には、その俳諧史的生命を早くも終えるに至る。それとともに、西鶴・松意・高政・惟中らの連中も第一線から退き、限られた一部の者が生き残って真面目に文学の道を求める。その雑然の中から新しい俳諧、すなわち蕉風へと開眼して行く。これを要するに、古風を脱皮するため一度は通過せねばならぬ階梯であった。

項目担当は芭蕉連句研究などで知られる島居清氏であり、［参考文献］として、乾裕幸『初期俳諧の展開』、今栄蔵「談林俳諧史」（明治書院『俳句講座　一』所収）をあげられている。

日本近世文学史を論じた先人の著書を一々あげれば、天文学的な数字になることは間違いないが、そのすべてが俳諧史にふれずには論じられないし、「貞門俳諧」「談林俳諧」を解説せずに「芭蕉」の「蕉風俳諧」は語れない。

その中で就中、『国史大辞典』の項目をあげたのは、「談林俳諧」を日本史上のある事象として客観的に捉えた定義を俎上に上せて論じる必要からである。

そこで右の項目「談林俳諧」を概括すれば、江戸時代になって、連歌から俳諧が独立の気運を高め、松永貞徳（一五七一～一六五三）を盟主とする貞門俳諧が全国的規模で行われたものの、「談林俳諧」は「貞門俳諧に続いて俳壇の主流を占めた」わけである。

しかし、貞門俳諧が松永貞徳を盟主として「寛永期以来半世紀にわたって流行した」「門流」として明確に定義できるに対して、「談林俳諧」は「当初、江戸の田代松意一派を江戸談林と称したが、それが漸次延宝期の西山宗因（一六〇五～一六八二）を中心とする新風をいうようになった。」という俳風の説明だけであって、「門流」の確立に対しては、曖昧模糊とした定義にしかならない。これはけっして右の島居清氏の定義が誤りや曲解ではなく、むしろ、一般的な定義なのである。

そうすると、「談林俳諧」は、一門や「門流」の名称ではなく、当時の俳人たちが「清新な風を期待する声」によ

って、「貞門の言語遊戯中心の俳風」を脱した同好の集団にすぎないことになる。

もっとも一門の盟主は定めないものの「大坂天満宮連歌師西山宗因を中心にかつ」いだことが共通点になるわけであるが、「延宝期（一六七三～一六八一）を中心に前後十余年間」の日本中の俳人たちにとっては、貞門派も談林派も句風は違うにしても、同等の俳人として認識しあっていたと考えて差し支えはなかろう。

まさしく、西山宗因自身、松永貞徳門であり、俳友に貞門は多い。

その宗因の弟子で大坂談林を代表する俳諧師「井原西鶴」も同様である。貞門派の西村長愛子撰『遠近集』［寛文六（一六六六）年）刊］に西鶴句が初見できることから、松永貞徳死後の貞門派と何らかの交流があったことは間違いない。その時の号は「鶴永」。延宝元（一六七三）年、大坂・生國魂神社南坊で万句俳諧の興行しするが、その頃から、西山宗因とも交流を深めていたのであろう。その年の冬ごろ師宗因の別号西翁の一字をとって、「鶴永」改め「西鶴」と号している。西山宗因が任ずる大坂談林俳壇の「一方の旗頭」となったわけである。

その西鶴とほぼ同じ頃に生まれ、ほぼ同じ頃に活躍し、ほぼ同じ年で亡くなったのが松尾芭蕉である。「延宝三年（一六七五）宗因が東下すると、急速に江戸俳壇も談林化し、若き日の芭蕉もこれにもまれて談林風に染まった一時期があった」とされるように、芭蕉は江戸談林ともいうべき俳壇の片隅に「桃青」として名を残しているのである。

今日の研究において、東の芭蕉と西の西鶴に面識はなかったとするのが通説であるが、西鶴が貞享元（一六八四）年六月五日、難波の住吉神社で催した一昼夜二万三千五百句の矢数俳諧興行の後見役に芭蕉門下の宝井其角もいることを考えれば、この頃、芭蕉一門と談林派は、わだかまりなく交遊していたといえよう。

ところで、先述の三千風の場合、延宝二（一六七四）年に松島をさまざまな詩歌で詠い上げる、撰集『松島眺望集』の刊行を企図するが、桃青（芭蕉）、西鶴、清風などから門流を越えて句が寄せられている。

その状況からふたたび考えれば、西山宗因の死後、談林の「限られた一部の者が生き残って」、「新しい俳諧、すな

わち蕉風へと開眼して行く。」わけであるが、それは、わかりやすい文学史としての展開相の説明に過ぎず、この時期の談林俳壇の誰が「真面目に文学の道を求め」、「その雑然の中から新しい俳諧、すなわち蕉風へと開眼して行」ったなど列挙することは不可能ではなかろうか。

もちろん、貞門派固守の随流から「ぬけ風・飛び体・阿蘭陀流と罵られ」、京都談林の惣本寺高政や岡西惟中などと破邪顕正論争となるが、あくまで貞門派と談林派の一部の論争であって、《蕉門》との争いにまで飛び火しているわけではない。

事実、西鶴の死後、西鶴の弟子たち、例えばその筆頭としてよい椎本才麿、西国や団水などは、《蕉門》との交流を盛んに行っている。談林派全盛期の信徳・素堂・言水・才麿、少し事情が違っても伊丹派の来山、鬼貫など多くの名だたる貞門派を飛び出して宗因のもとで談林派を形成した俳人たちも宗因の死後、談林俳諧を去っていったり、《蕉門》との交流を深めていった。これは、談林俳壇の節操のなさ、組織力のなさとも言えようが、元来、貞門派の頑迷な組織力、「門流」を嫌った人々が宗因のもとに集まってきた自由な集団が談林派ではなかったか。後の『俳家大系図』［春明著、天保九（一八三八）年刊］のような系統図は、談林俳壇の人々の意識としてはあっても、自他、彼我を決め、排他的になるための組織、特に《蕉門》と対抗する組織ではなかったのである。

それに比して、《蕉門》は「蕉門の十哲」に象徴されるように、芭蕉を孔子に見立てるような俳聖としてのカリスマ性を醸成した。地方の俳諧勢力文化圏の盟主たちにとっては、今はやりの三都で君臨する《蕉門》の「門流」に入る方が己の地域で主導権を発揮しやすい。確固たる組織があって、次にすぐれた芸術性俳諧「蕉風」が受け容れられる。芭蕉と地方俳諧文化圏の有力者との出会いは、俳諧勢力拡大と消滅をかけた相互依存であったのである。

このように考えると、『おくのほそ道』の旅において、その経路を芭蕉が過ぎ去った後、オセロの勝ちゲームのように、次々と《蕉門》の色に変わっていく現象は氷解するのである。

五、おわりに代えて

長年求めていた康工編『俳諧百一集』［明和二（一七六五）年刊。寺町通二条下町（京）橘屋治兵衛　大本一冊］を入手した。書誌の詳細はすでに芭蕉記念館「芭蕉記念館所蔵本『俳諧百一集』」や竹谷蒼郎『俳諧百一集と芭蕉新巻』にあるので略する。

書名は、百人一句集の意。芭蕉を巻頭に、守武・宗鑑以下康工を含め麦林（乙由）で終わる俳人一〇〇人を選び、画像と一句を掲げて康工の短評を添える。編者は越中国戸出の人で麦林・希因門のため、北陸の俳家は全体の三分の一以上を占める。（『俳文学大辞典』）

本書は、典型的な越中地方の蕉門のための俳書といえるものである。その中での蕉門の系譜は、その自序に「永正の頃に守武あり。天文に宗鑑、寛永に貞徳・貞室、慶安に立圃・重頼・季吟、寛文に宗因、かく世〻に先達有といへども、其體一手に出るがごとし。」としている。「西鶴」や「惟中」のような大坂談林の名はなく、北陸の俳壇の誇示といえよう。しかし、後に掲げたように、編者の「康工」を含めて皆、俳諧の宗匠としてふさわしい格好に描かれている。ただ、若くして散華した「一笑」のみ平服である。ところが、同じ絵俳書でも西鶴が編集し、西鶴自画とされる『歌仙大坂俳諧師』［延宝三（一六七三）年刊］は、大坂俳壇の誇示といえようが、気負いがない。『俳諧百一集』の俳人たちの描き方は、ほんの数十年で俳諧が商業化し、句風や教養や家格などより正当な「門流」に連なることが俳家の声望につながったことを物語っている。特に地方俳壇では必要であったのである。そのとき、正当な「門流」とは「門流」形成を好まなかった談林俳諧より、「門流」形成にこだわった《蕉門》に傾斜したのではないか。地方俳壇を回れば、「門流」を求める人々によって、《蕉門》は拡大する。実際に江戸時代を通じ、《蕉門》に連なる各務

支考の美濃派や麦林の伊勢派が実践したことである。都市と地方の俳諧文化圏を握ったとき、日本の俳諧は《蕉門》一色になる。――このおぼろげな野心が、すでに『おくのほそ道』を旅した芭蕉にはあったのではなかろうか。しかし、芭蕉生前に《蕉門》は九州・四国まで広がらなかった。芭蕉が明石より西へ行くまでに昇天してしまったからである。「夢は枯れ野を」かけめぐったわけである。

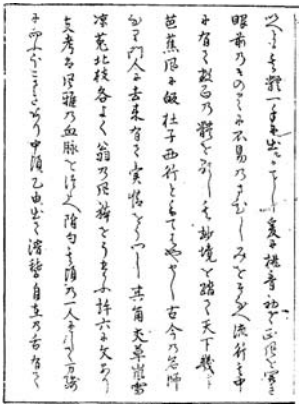
『おくのほそ道』本文は『日本古典文学全集』（小学館）を用いた。したがって、素龍筆芭蕉所持本が底本である。また、『曽良旅日記』ならびに『奥細道菅菰抄』は『岩波文庫　おくのほそ道』に併収されたものを用いた。

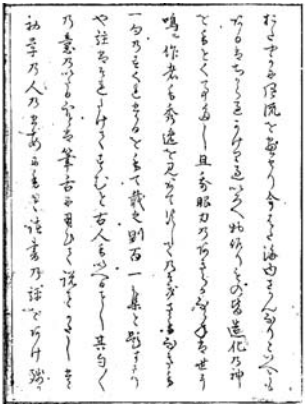
本稿は文部科学省科学研究費助成事業から、基盤研究（C）「地方談林俳諧文化圏の発展と消長～西鶴の諸国話的方法との関係から～」（平成二十四年度～平成二十八年度・課題番号：２４５２０２５２）として、助成を受けている。

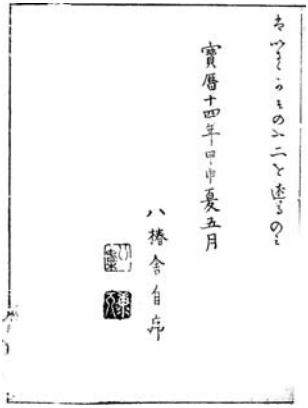
――文学部教授――

『俳諧百一集』（森田架蔵本）序と刊記

俳諧百一集序　越中廉工選

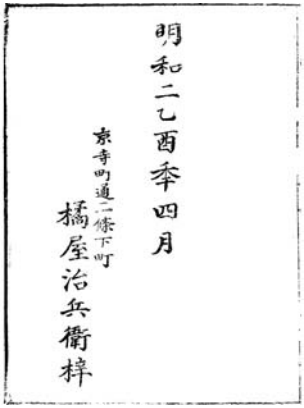






寶暦十四年甲申夏五月

八樁舎自序



明和二乙酉季四月

京寺町通二條下町

橘屋治兵衛梓

『俳諧百一集』より

芭蕉

貞徳

季吟

宗因

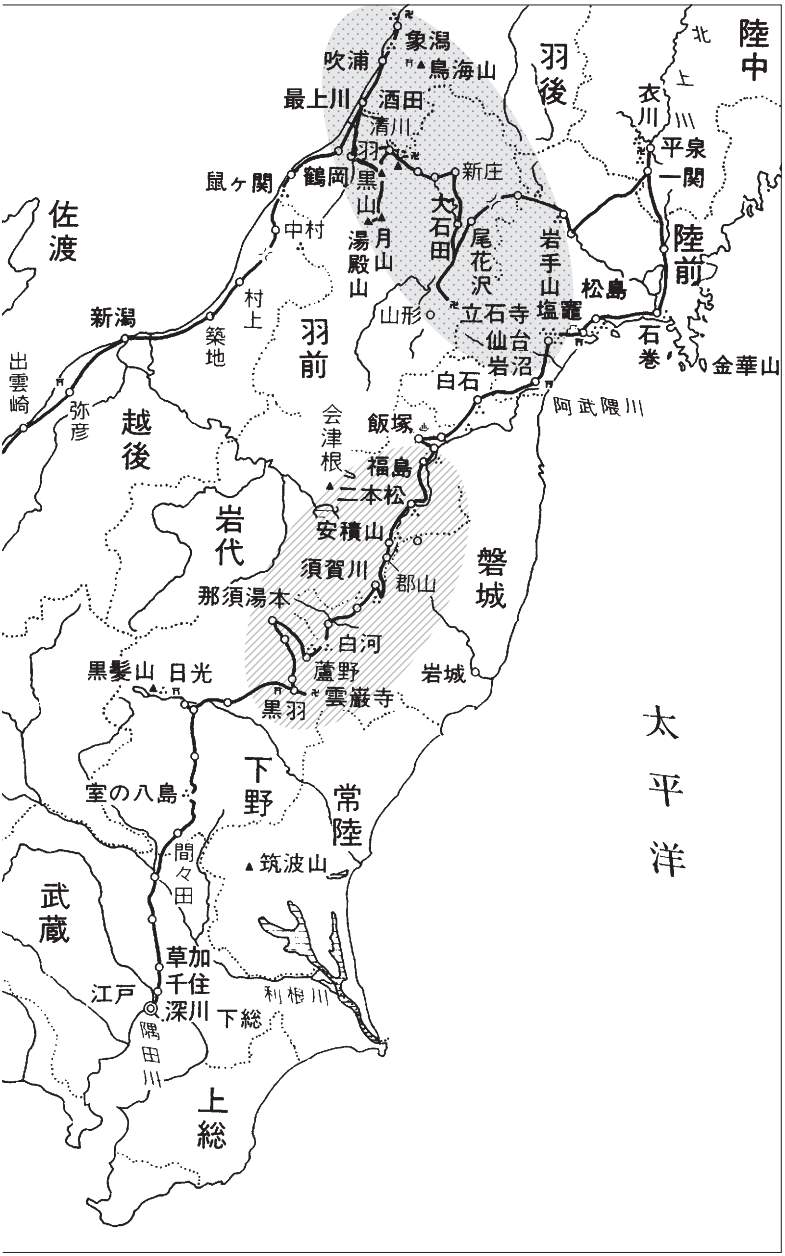
北枝

一笑

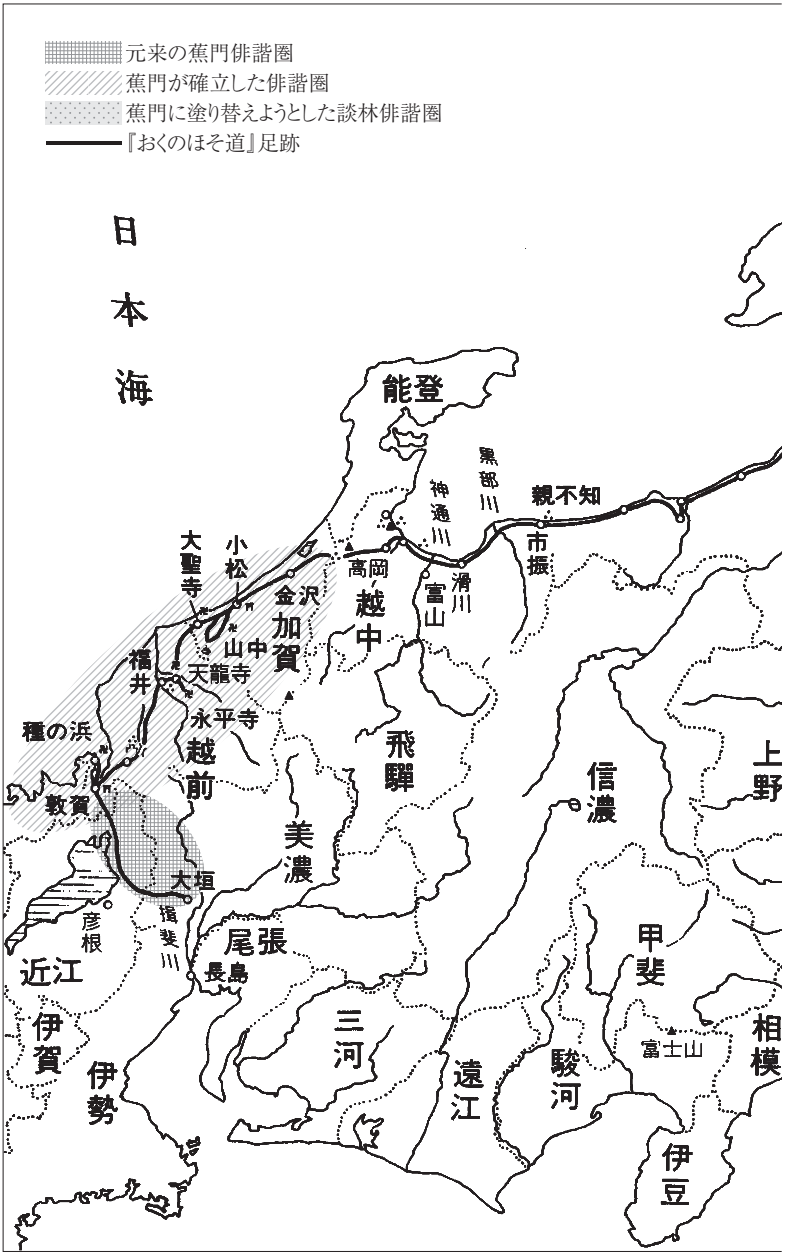
より

『歌仙大阪俳諧師』（関西学院大学所蔵本）

俳諧勢力図


陸中
北上川
羽後
象潟
吹浦
鳥海山
最上川
酒田
清川
羽黒山
鶴岡
鼠ヶ関
新庄
大石田
尾花沢
月山
湯殿山
中村
佐渡
衣川
平泉
一関
陸前
岩手山
松島
塩竈
石巻
金華山
山形
立石寺
仙台
沼
岩
白石
阿武隈川
村上
築地
新潟
羽前
出雲崎
弥彦
越後
会津根
飯塚
福島
二本松
安積山
須賀川
郡山
岩代
磐城
那須湯本
白河
蘆野
雲巌寺
岩城
黒髪山
日光
黒羽
太平洋
下野
常陸
室の八島
筑波山
間々田
武蔵
草加
千住
江戸
深川
隅田川
利根川
下総
上総

芭蕉が塗り替えた


元来の蕉門俳諧圏
蕉門が確立した俳諧圏
蕉門に塗り替えようとした談林俳諧圏
『おくのほそ道』足跡
日本海
能登
黒部川
神通川
親不知
市振
高岡
富山
滑川
越中
大聖寺
小松
金沢
加賀
山中
福井
天龍寺
永平寺
越前
種の浜
敦賀
飛騨
信濃
上野
美濃
大垣
揖斐川
彦根
近江
尾張
長島
甲斐
富士山
相模
伊賀
伊勢
三河
遠江
駿河
伊豆